

1536年（天文5年）東川原の赤井六郎左衛門は、大川の水を北会津の真渡の東側から引き入れて、鈴湊、東原、細工名、村田を御池、青津までおよそ12kmにおよぶ水路を計画し、青木村の稲村利兵衛と相談して領主にねがい出ました。

ねがいを許されて、村人たちは喜び勇んで工事に取り組み、くわで土を掘りおこし、もっこで土をかついで運びました。この工事には、領主からのべ1万人の人夫と多くの費用があたえられました。

六郎左衛門は、せきの完成を目の前にしてなくなりましたが、長男の六平が引きついで、ついにその年のうちにこの大事業をなしとげました。そして、この地方がいつまでたってもゆたかに栄えることを願って「富川ぜき」と名づけました。それから、年々水田が新しく開こんされて2倍以上に広がり、せきの下流では水がたりなくなりました。

1829年（文政12年）には、日照りがつづいて田植えができないところがでてきました。そこで、村の代表の人たちが相談して、次の年に富川ぜきの下流の真渡地内の大川から田畑に水を補給するための「加水ぜき」づくりを始め、その次の年の春に完成させました。この工事には15歳から60歳までの男の人はみんなでて、交代で昼も夜も働きました。そして、このせきを「富川加水ぜき」と呼ぶようになりました。



今の富川ぜきの頭首工  
(北会津村蟹川地内)



富川ぜきのコントローラー  
(阿賀川土地改良区コントロール室)